

第1回新県立中央図書館DX検討に関する有識者会議 委員コメント内容

項目	主な意見
DX定義	<ul style="list-style-type: none"> ・図書館DXの対象は、県民だけでなく県職員も対象 ・全てがデジタルであることが常にハッピーをもたらすものではない ・ユーザーの体験、ユーザーエクスペリエンスの向上が重要 ・ユーザーサイドから、最もその時々合理性が高く、決定権が与えられるような情報への接し方ができることが肝要 ・ユーザーが主語であって、知識や情報の基盤、コモンズとしての図書館はどうあることがより望ましいのかという観点 ・データ駆動型サービスの創出を容易にするような、図書館の組織文化の変革 (①図書館内の働き方改革、②デジタル化(既存ワークフローやサービスのオンライン化、新たな創出など))
DX取組	<ul style="list-style-type: none"> ・データ駆動型サービスを実現可能とする基盤としての未来の図書館。 (①マルチモーダルでの問合せ応答システム、②エビデンスベースの政策立案システム) ・地域資料をアーカイブする機能も重要 ・地域資料を作る市民活動を図書館が支援 ・ネットで何でも検索できる時代、県独自の地域コンテンツを充実させていく ・新しい技術が欲しい等、課題解決をするような場というところとしての図書館、そういう人たちの交流の場 ・その人の趣味嗜好に合った検索(パーソナライズ)ができること ・ソーシャルリーディング的なものが今後の若い層に普及していく、読書の一つの形がそこにあるのではないか(共読) ・オーディオブックが日本でも今後普及する可能性 ・ユーザーのモニタリングが重要 ・駐車場が大きく、車番認証技術などで車の年式型式まで取れるので、年収や家族構成等が分析できる ・図書館アプリとカーナビ等をSDL連携して、車の走行状況等と連携したコンテンツをナビに転送して中継するなど ・本の内容をフリーテキストサーチし、本を部分的に解体して自分用の本を作るような、既存の「本」という境界を溶かす、必要な部分だけ抽出する仕組み。新しい読書の形 ・本はもう国会図書館に一つデータあればいいということになれば、静岡県で固有でどうするという部分ではなくなるのでは ・デジタル情報が中央に収斂していく中で、郷土資料、あるいは行政の情報とか地域情報とか、県立図書館の役割を考える
DX会議 今後の運営	<ul style="list-style-type: none"> ・今年度提言を提出した後も何らかの形でメンバーの一部が図書館のDX推進に関与する方がいい ・建築というスピードと、情報の方のスピードの折り合いをどう付けるか(建築を進める間にも情報技術は急激な進歩) ・常に変わり得る可変的なやり方をしていくアジャイルガバナンスが重要 ・情報の公開性や透明性を高めていく
組織運営	<ul style="list-style-type: none"> ・図書館を支える人材採用育成に関しても提言を行うのが望ましい ・DXはボトムアップで解決できるものではなく、強いリーダーシップが必要(館長人事)